

地球温暖化時代の異常気象 (気象ブックス 033)

吉野正敏 著, 成山堂書店 発行, 2010年10月, 201 pp. 定価 1,890 円

東日本津波大震災および原発事故のニュースが少し途切れたかと思えば、猛暑・豪雨と連日のように報道される「異常気象」。震災被災地域での生活基盤のみならず、牛肉・コメという日本の食卓の中心が、これらの「複合災害」により、広範囲にさらに脅かされようとしている。本書は震災前に出版されたものであるが、震災により地盤が物理的に脆弱になっているだけでなく、堤防や道路などの社会基盤、さらには人々の生活・精神面までぜい弱となっている今、「異常気象」を伴う複合災害に対する防災・減災が火急の課題となっており、本書はまさに「地球温暖化」と「異常気象」の正しい理解に欠かせないものである。

さて本書は「第1章 序章」のあと、「2. 熱波・異常高温・ヒートアイランド」、「3. 台風・サイクロン」、「4. 雨と洪水」、「5. 寒波・冬の低気圧・冬の雷」、「6. 山の雪・平野の雪」、「7. 干ばつ・冷夏・霧」、「8. 植物季節」、そして「9. 突風・竜巻・木枯らし」の全9章で構成されている。トップに「熱波」が来るあたりは、「地球温暖化時代の」というタイトルからも当然であろうが、やはり人々の最大の関心事は、豪雨もさることながらまず「暑さ」であろう。多くの人々が住む都市において体感しそしてニュースとなる「暑さ」の中には、都市自体による高温効果すなわち「ヒートアイランド」が含まれているが、この項目を第2章に併せて構成したことに、まず感嘆せずにはいられない。次に第3章の台風の中で、南大東島における台風とその災害の記録、およびサトウキビへの影響が書かれている点にも、注目すべきである。デスク上のデータ解析と広域マッピングを主として研究を進めていけば、本土から離れた島々は置き去りにしがちであり、ましてやサ

トウキビなどの農業生産に台風が大に関わっているという視点は、私自身がすっかり忘れていたもので、この項を読みながら反省することしきりであった。

また雨と洪水を扱う第4章では、長期変動、世界的な災害のほか、出雲地方における神話と神社の扁形樹の話にも触れているのが驚きである。最近では土木系の洪水と河川管理、その他災害に関するシンポジウムを見聞することが多いが、単に超過確率?%? mm という構造側の指標に関するものか、ハザードマップという、一見わかりやすく総合的なようで見ると人にとっては実はゼロイチの情報しかない(今回の津波災害でも悪い方に働いた例が報告されている)ような話が多い。しかし今回の津波災害に対し、貞観地震まで遡って参照していれば、と言われるように、古よりの経験、社会文化的・民俗学的な思考に深く学ぶことが必要であることも本書は教えてくれる。このような視点からの記述は後半、著名画家ゴヤの絵に扁形樹の絵が多いことと彼の絵から読み取れる当時の気候に関するくだりにもあり、また感嘆した次第である。扁形樹の写真は各章の随所にみられ、「風」に関する研究を最も得意とした著者ならではのものである。

このほか私が感嘆し強く購入を勧める点が随所に数多くあり、とても記しきれものではないが、各章の内容を細かく見ても、当然のことながら気象予報士や科学ジャーナリストが書く類のものでなく、科学的資料に正確に準拠した上で農業気象学および気候・気象学的(本年度、日本気象学会名誉会員として推挙)知見を極めてわかりやすく書いていることが特筆できる。

(農業環境技術研究所 西森基貴)